

天乃  
立

E 32

335





まゝ何れも唯けしき事  
慈母の志形ありとて  
しるく出づるに  
鯨のさへ山はうそ  
けけい様岩のうそ  
名をいそや  
人いけり  
平田のま編者

上人百代を愚心を説く  
つれな随喜いとす  
一箇ます  
けり  
とて

温尼  
世は但る温尼を賞する  
けり  
の郡より

を向て

久熾み屋の飼へるひし

大は月よりふををさるるを

しうれハ俱丹の境にを

る路一はらふれをを

竹をみうーらを馬を

よちのち

唾蟬の日は照らるる

さうと蟬も入る路を

け端をりりけり青の茂

りくをををををを

ふあをををををを

らくをををををを

あををを

郭公端やををの屋を

天座よりけり端をを

桐をををををを

をををををを

一と酒をきく旅亭の  
磨きこころの人のう旅人  
情あふくをきくを館を  
あふくをきく

天田内とくあふくたき  
あふくをきくわのわ  
野とくをきくをきく  
末社社とくわのわ  
後我をきくをきく

鬼城をきくをきく  
をきくをきくをきく  
内とくをきくをきく  
先とくをきくをきく  
かたとくをきくをきく  
をきくをきくをきく  
照とくをきくをきく  
明とくをきくをきく

月とくをきくをきく

所山高くわきずのはかり  
その岩戸とらふ岩の間  
造りつけずおねをり  
と家内をいそぐれ  
猶岩角の風をけつあ  
根よりをさよりと溪原く  
りうとら産産産産産  
い奇所をすくく山溪  
く産くく一枚の盤石

みくおつともくすくあ  
け物物をくくく  
さくひくくくくく  
すくくくくくくく  
いひひくく

まのあきくくく橋谷のく  
けね調くくくく  
まのあきくくく  
心地くくく又関

何もの面を國が津より  
そそりけりひるはれ  
佛性寺越へてふた  
はく物なり二河川と  
名ありんそふれのみ天  
獨我勝るも二河川と  
けふも安くそふれ  
そふれのみけふも  
一河川とふれと見ゆ

すもろ。山原のふれより  
物なり。いふも。二河川  
折るふれす。ふれ。二河川  
ふれ。

百河川。二河川。二河川。

け川のふれ。ふれ。ふれ。ふれ。  
ふれ。ふれ。ふれ。ふれ。  
ふれ。ふれ。ふれ。ふれ。  
ふれ。ふれ。ふれ。ふれ。

鬼ヶ城の要所は今様周  
果を海を渡るやと思ふ  
うあーううう

目くらましの術ううーかゝるあは  
ううー指しあはるのう  
をさあううううううう  
ううううううううう  
見あううううううう  
玉を拾ひ取中ううう

けろは花う物も書  
付人ううううう  
見旅のひううう  
ううううううう  
ううううううう  
ううううううう

普甲峠ううう首をうう  
止石ううう眼ううう  
末原ううう

今澤山嶽在る秋の



何より愛宕山より  
都立と云ふ  
方け山と云ふ  
奸盗屋屋と云ふ  
過すといふ  
宮内  
く  
借人のおと  
我相

いふと云ふやありといふ君  
おと云ふは  
よのたふある  
又ある  
いふと云ふは  
のいふと云ふは  
おと云ふは  
花と云ふは  
首と云ふは



舟よりいづれに  
 漕ぎたよとわづらふ舟を  
 とらふといふあはれとて  
 にやはあらふ事いふ事  
 そもつゝのるふ漕ぎ舟を  
 吹かす風のそよとて  
 風にこそなほ通ひといふ  
 大勢よといふと舟を  
 舟をよとて舟をよとて

ありふふ酒の老翁ありそ  
中も松の根より竹をそえ  
ともちわきくいとまひん  
海潮きくおらねと人あり  
きこふふの歌は

[illegible]

いらん子

押し勝目点や林葉三思乃  
一ううい天工の妙人なる始  
る有是る市なる後一其の  
不西湖の終を雁を渡りて  
摘別ふ奇韻ありて更  
仙壇に入教ふ似たりゆ  
千何をけつて夏田を  
雪ふよりわくまて春色うふ

勝上の雲鹿神在るごとく  
岸上の狗塚人をいづれむ  
物子と流の極名由良の嶽の  
街名物子と流の極名由良の嶽の  
絶ありてむつとく由良の嶽の  
例の長者とくものさういへり  
龍虎の松杉とく松杉の松  
う都とくいけり磯とく古  
郷をとおし首をたてていけり

倉橋川神の浦丹後不二  
け妙境とすくまの影と  
分志の戸速<sup>はや</sup>の里とむ  
閑音とてふて帆影森  
ありていふ岩の岸と  
ありそふ

神山の岩腸とていふ岩接  
何つらとていふと小舟の  
とていふと草うらとていふ

いふていふ岩の岸とていふ  
何とていふとていふとていふ  
ありていふとていふとていふ  
作の歌とていふとていふ

成るやとていふとていふとていふ  
机とていふとていふとていふ  
順記とていふとていふとていふ  
とていふとていふとていふ

ありては光りありては山ありては  
無井ありてはありては月ありては神あり  
古きありては事ありては人ありては事  
ありては事ありては事ありては事あり  
いんては事あり

橋立ちてはありては松根ありては腰あり  
神人の造作き家不圓あり  
聖地凡骨をとりては白雲  
ありては古くは佳作ありては

奇詠をよみては彼よけを  
ありては唯ありては事あり  
ありては

橋立ちては事ありては浪ありては東  
ありては事ありては事ありては事あり

ありては事ありては事ありては事あり  
ありては事ありては事ありては事あり  
ありては事ありては事ありては事あり  
ありては事ありては事ありては事あり



舟出らるれば既に夕なり  
さういふ歌を聞かすこと  
て舟の里やうもみゆを  
いふてや僧をふと城く  
人をうきも女を教を播蓮  
みゆふて人ハ諸侯ふあら  
酒をんを信めを信をぬ  
美酒佳者をとくこといふ  
ふて岩の岸にさういふ

櫻吹雪のほれを橋より眺望  
つゝふさふさ舟を舟を舟を  
のつゝ舟を舟を舟を舟を  
眺望舟を舟を舟を舟を

郭公声引く松の里  
初更さうり峯山み入松桐村  
重記さうり松を吊みけ重記  
妻うて舟りさのふわうさうら  
さういふさういふ舟を舟を



いふ黒髪を髪に髪を髪  
同ちぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

重訛の娘

元身くくくくくくくくく  
竹下氏み方術を学ん  
ててててててててて  
松山あきく南少く高きく

きく袖く松山入く  
松山きくく日数くくく  
くくく地をくく物。

松山きくくくくくく  
松山きくくくくくく

松山きくくくくくく

寛政八年七月日

購一  
入本  
明治三十二年五月廿五日  
紀元二千六百一十三年

